Heroes of the Meiji.

紫紺の勇者たち

―明大体育会の系譜―

第36回 拳法部

文・撮影／菊地 武顕
写真提供／明大スポーツ新聞

全日本2連覇中の強豪校でキャプテンの果たす役割とは

昨年の11月24日、BODYMAKERコロシアム。連覇を目指して臨んだ明治は、準決勝の関西大との一戦で窮地に追い込まれた。

団体戦は7人制。先鋒が敗れ次峰が勝った後、参峰と中堅が連敗して一気に王手をかけられたのだ。参峰として出場した大貫洋平（文3＝当時、以下同・東海大相模）は、その時のことをこう回想する。

「ポイントゲッターとして出させていただいたのに負けてしまい、これはまずいと思いました。でも不思議と、3敗しても、うちが負けるとは思いませんでした。大石さんに繋げられれば絶対に勝てる、と」

大将戦に出る大石健作主将（文4・初芝立命館）に、絶大な信頼を寄せていたのだ。その思いは、参将の榊原亮（法3・大阪桐蔭）、副将の原田優介（法1・朝倉）も同じ。榊原は個人戦ベスト8に入った強豪を相手に2−0で完勝。原田は残り1秒で一本を取るという劇的な勝利。3−3で迎えた大将戦で登場した大石は、安定した試合運びで相手を封じ、チームを決勝に導いた。

これで勢いに乗った明治は、決勝で同志社大を6−0と圧倒。連覇を飾った。

主将は大将戦に臨む

高村潤監督（昭和60年卒）は、大石を絶賛する。

「明治のキャプテンは、団体戦では絶対に勝たないといけない。個人戦で自分よりも良い成績を残した格上が相手でも、団体戦でぶつかった以上は必ず勝つ。それが使命です。私は、原則キャプテンを大将にします。先に出場する6人は『大将戦まで持ち込めば必ず勝てる』という繋ぎの意識を持って、それぞれの戦いに臨むんです。今年、大石は団体戦で負けたことがない。立派です」

高村監督も現役時代は主将だった。3年時、4年時に数々の個人タイトルを獲り、団体戦出場試合も負け知らずの強豪だが、

「キャプテンの責任が重く感じられて、団体戦の試合の前には一睡もで

大会2連覇を果たし、歓喜の記念写真

キャプテンの重責を全うした大石

大貫洋平新主将

高村潤監督

秋谷紀男部長

きませんでした。最後の団体戦の東日本大学選手権では準々決勝で立教に負けたんですが、悔しいというよりも重責から解放された安堵感が強かったと記憶しています」

キャプテンがこれほどまでに重い任を負うのも、明治が古豪であり強豪であるからだ。

関東の黎明期から活躍

日本拳法は昭和7年に大阪で生まれ、関東に伝わったのは昭和28年。徳島から森良之祐師範が上京し普及に努めたという。

明治に拳法部が生まれたのは、翌29年。昭和30年に開かれた第1回関東学生拳法リーグ戦（参加校は、明治、立正、慶應、中央、早稲田の5校）で全勝優勝した。

以来、関東きっての強豪として鳴らしたが、大学内では同好会の扱いで、体育会所属の部として認められなかった。日本拳法という武道が、まだ一般的に知られていなかったことがネックだったようだ。

体育会加盟は、昭和40年。部長や主務らの地道な働きかけがあってのことだが、それまで開催された関東リーグ戦18大会中、10回優勝した実績も評価されてのことだろう。

昭和42年の第12回全日本学生選手権大会（大阪府立体育会館）では、決勝で大阪商業大を破り、初の全国優勝を遂げた。

この時の主将・篠原保彦（故人）は、「既に副将戦で優勝が決まっていたので、大将戦の時は涙が目に溢れて相手が全然見えなかった」と語った（『拳法部五十年史』より）。とはいえ大将戦を2－0で制しているあたり、いかにも明治のキャプテンらしい逸話である。

「拳法はチーム競技」

さて3連覇を目指す今年のチームを引っ張るのは、前述の大貫。

「拳法は個人同士の戦いですけど、実はチーム競技だと思っています。みんなで同じ練習をし、互いを意識し合って良いところを吸収して、強くなっていくんだと思います。自分自身が試合に勝つのは当たり前。勝つチーム作りのため、頑張りたいです。目標は、最低でも優勝です」

3月16日、駿河台キャンパスアカデミーコモンで、「60周年ならびに優勝記念祝賀会」が盛大に行われた。次の10年はどのような10年となるのだろう。まずは大貫のキャプテンシーに期待がかかる。（文中敬称略）